放課後ふぇすてぃばる番外編

あなざーふぇすてぃばる

山本沙姫

表紙イラスト：送り萬都

試し読み版

二次元ぷち文庫

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『放課後ふぇすてぃばる番外編　あなざーふぇすてぃばる』
に基づいて作成しております。

※本作は二次元ドリーム文庫『放課後ふぇすてぃばる メイド DE 学園祭』（キルタイムコミュニケーション刊）とともにお読みいただきますと、よりお楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

放課後ふぇすてぃばる番外編
あなざーふぇすてぃばる
山本沙姫
表紙／送り萬都
二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

三木達也（みきたつや）

ゆくゆくは棟梁になることを夢見る少年。ベテランの大工にも見える風貌で、しのぶにはオヤジとからかわれる。

中里しのぶ（なかざと）

派手な化粧に遊び好きとギャルっぽい少女。通称ギャル里。素行不良で教師からは目をつけられていることも。

季節は秋。世はおしなべて、学園祭シーズン真っ只中。

ここ、私立琴沢(ことさわ)学園も、名物イベント「琴沢祭」の開催に向けて、多くの学生達が準備に勤しんでいた。普段は味気ない学び舎が、日を追う毎に遊びの空間へと姿を変えていく。多くのクラスが仕上げの段階に入っている中で唯一つ、なかなかテーマが決まらず大幅に進行が遅れている教室があった。しかしクラス委員長の少女と、本来彼女を支えるべき副委員長の代役を務めたお人よし少年の尽力により、ようやく決まったメイド喫茶開店に向けて急ピッチで作業が進められている。この日の放課後も……。

シュッシュッシュッシュッ……。

慌ただしい教室の中に響き渡る澄んだ摩擦音。それはまるで新雪の斜面に鮮やかなシュプールを刻むスキーヤーが奏でる、大自然のハーモニーのようだ。一人の男子生徒が、店の看板にする化粧板の断面に鉋がけしているのである。

軽く日焼けした褐色の肌に、身の丈一七〇センチほどの筋肉質な体躯(たいく)。白いワイシャツを肘まで捲り、剥き出した豪腕には熊を髣髴とさせる剛毛が生えている。短く刈り上げた黒髪と太い眉毛。それに広い額と眉間に深い皺が刻まれ、一見するとベテランの大工と見間違えそうな風貌の持ち主だが、れっきとした十代の若者だ。

彼の名前は三木(みき)達也(たつや)。親子三代に渡る大工の家系で、ゆくゆくは棟梁になる事を目指す

手先の器用な少年である。

「……ふむ、上出来上出来。さて……」

断面の仕上がり具合を確認すると、彼は傍らに置かれたペンキとハケに手を伸ばす。あとは店名を書き込めば完成だ。しかしいつまでたっても塗料をクルクルと撹拌するばかりで、なかなか書こうとしない。

（……だ、大丈夫。落ち着いて書けば、失敗なんかしねえって……）

「あー！　ダメですよー三木せんぱーい。お店の名前を書く人は決まってるって、幸太お兄ちゃんが言ってましたよー」

心の中で呟いたその時、小鳥の囀りのように可愛らしい声で呼びかけながら、短い茶髪の少女が駆け寄ってきた。身の丈一四〇センチ少々のスリムな体躯と、ふっくらと柔らかそうな頬。それにクリクリとよく動く、赤みがかった大きな瞳が可愛らしい元気娘の名は月島蛍。達也を先輩と呼ぶ彼女は、もちろんこのクラスの生徒ではない。しかし副委員長の代役を買って出た達也の親友、石黒幸太を「お兄ちゃん」と慕ってよく遊びに来るため、教室のマスコット扱いされている。またコスプレが趣味という事で、衣装の着こなしや接客の仕方のアドバイザーとして毎日のように手伝いに来ていた。今は作業中にケガをした幸太と、彼を手当するために委員長の朝日奈桃子が保健室に行っているため、抜けた二人の分も頑張って働いている。

「そ、そうか……そいつは助かった……」

可愛い後輩の言葉に、大工少年はホッと胸を撫で下ろす。なぜなら彼は手先が器用ではあるものの、きれいな字を書くのは大の苦手なのだ。

「ははは、そうだよなー。オヤジのきったねー字で書かれた看板じゃ、お客が来なくなっちゃうもんねー」

安心した隙を突くように飛び込んでくる、妙に馴れ馴れしい少女の声。クラス一の遊び好き娘、通称ギャル里こと中里（なかざと）しのぶが後ろから話しかけてきた。いつも老け顔の達也をオヤジ呼ばわりしてからかってくる彼女は、彼にとって言わば天敵のような存在だ。

「いちいち五月蠅いなお前は……って、な、何だよ、その格好は!!?」

うざったそうに振り向く達也の目に飛び込んでくる、驚くべき日焼け娘の姿。彼女は出し物用にレンタルした、ファミレスタイプのメイド服を着ているのだ。決して大きいとは言えない七十五センチほどのバストを、左右から肩紐で挟んで強調するようなエプロン。それに天使の羽根を髣髴とさせる白いフリルが左右に張り出し、実に可愛らしい。日焼けサロンでこんがりと焼いた細い足を剥き出しにしたピンクのスカートは少し動いただけで中が見えてしまうかと思えるほど短く危なっかしい。それにピッチリと腰まわりに張りついていて、前から見ても洋梨型に張り出しているのがわかる、少し大きめのヒップのラインを映し出していた。

しかし、キュートでセクシーな姿を根本から破壊するものがある。金色に染めすぎて少々痛んだ縮れ気味の長い髪と、顔面に施されたどぎついメイクだ。濃い紫のアイシャドウを入れた目まわりは、長い付け睫毛（まつげ）と相俟って威圧的に睨みつけているような可愛げのない雰囲気を醸し出している。さらに唇に塗られたオレンジ色のリップクリームは、赤いラメ入りで異様にギラギラと輝き、けばけばしい事この上ない。一昔前ならヤマンバなどと呼ばれていたような派手な化粧は、最早特殊メイクと言って差し支えない。彼女がギャル里と呼ばれる所以が、そこにある。

「へへー、どーよ。なかなか似合ってて可愛いだろー？」

壮絶な姿にあっけにとられる達也を気にも留めず、色黒メイドは両手を腰に当てて少し足を開いた威張りポーズで言い放つ。勝ち誇ったように張った胸が、ほんの少しだけプルンと揺れた。

「……はっきり言おう。ぜんっぜん似合ってない」

しかし感想を求められた大工少年は、冷めた口調で力いっぱい否定する。

「そうよねー、三木君の言う通り。やっぱりメイド喫茶でそのメイクはないわ」

「そうそう、場違いすぎるわよ」

達也の言葉に乗っかるように、背の高いおかっぱ頭の眼鏡少女と小柄でガッシリした体格のポニーテール娘が話に割り込んできた。しのぶの友人、美香（みか）と鈴子（すずこ）である。

「なっ、なんだよー美香も鈴子も……そんな言い方、ないだろー」
遊び仲間の辛らつな言葉に、ギャル里はプーッと頬を膨らませて不満を漏らす。
「まあまあ、そんなに怒らない怒らない。でもさー、こうすれば……」
不機嫌な友を宥めつつ、意味ありげな笑みを浮かべて彼女に近づいた美香はポケットからハンカチを取り出して、ヤマンバメイドの顔に押しつけた。
「あっ、ややややめろよぉー、はぶっ、ふんぐっ、メっ、メイクが……んんっ！」
「ええい、ジタバタしなさんなっ！」
突然顔を撫で回されて、ワケがわからず暴れ回るしのぶ。彼女の背後に回り込んだ鈴子が、引き締まった両腕で力いっぱい羽交い絞めにする。小柄ながら柔道二段の彼女に掴まれては、いくらもがいても太刀打ちなどできるはずがない。
「お、おい……乱暴はよしなよ……」
異様にテンションが上がっている二人に気後れしながらも、達也はなんとか乱暴なメイク落としを止めようとする。小憎らしい彼女だが、いくらなんでも可哀そうに思えたのだ。しかし制止する言葉に耳を貸さないクラスメート達は、とうとう嫌がる友人の化粧を完全に落としてしまった。
「ジャーン！　どう、三木君。これなら似合うでしょ？」
顔からハンカチを剥がし、達也の前にすっぴんになった中里を突き出した美香が、やけ

にウキウキとした口調で聞いてくる。

（え……えええっ‼　こ、これが中里？）

大工少年の屈強な身体の中を、落雷を浴びたような衝撃が走った。初めて目にする遊び人ギャルの素顔。いつもはアイシャドウのせいで目付きが悪く見えるが、メイクを落とせば思いのほか優しそうなつぶらな目をしている。それにインパクトがありすぎる化粧のせいで気付かなかったが、低く丸い小鼻やふっくらとした頬のラインなど、まだあどけなさが残る可愛らしさが感じられた。唇の色も桜の花弁を髣髴とさせる薄い桃色をしており、化粧では出せない自然な美しさを醸し出している。それに、よくよく見れば焼けた肌には染みや肌荒れがなく、しっとりとした艶とピチピチの張りがあって実に健康的だ。口うるさいギャルの変貌ぶりに、達也は思わず息を飲む。魂ごと両目が惹きつけられて、まばたき一つできない。

「わぁ～、中里先輩かーわいいー。お化粧なんかしない方がいいですよぉ。ねっ、三木先輩もそう思いますよねぇ？」

パチパチと手を叩きながら、蛍が無邪気に聞いてくる。

「よっ、よしてよチビちゃん……」

はしゃぐ後輩をニックネームで呼びつつ、中里は顔の前で両手をパタパタと大きく振った。チラチラと、達也の様子を窺いながら。

「い、いゃ……やっぱり似合わねえよ。メイド服なんて……」
賑やかな後輩娘の言葉にハッと我に返った大工少年は、金髪メイドから目を逸らしてそそくさと床に散らばった木屑をかたづけ始める。実に素っ気ない態度で。
「……わっ、悪かったわね！　似合ってなくて。まあ、オヤジに褒められたって嬉しくなんかな～いわよ！」
犬猿の仲である老け顔少年にバカにされたのがよほど悔しいのか、中里はツカツカと苛立(いらだ)たしい足音を立てて教室から出て行く。しかし肩を落としたその後ろ姿には、どことなく寂しさが感じられた。
（やばっ！　言いすぎた……）
「もう、ダメじゃないですか先輩。あんな酷い事言っちゃ……」
彼女の姿を見て少し後悔する彼の耳に、おきゃんな後輩の声が鋭く突き刺さる。ちょっと言いすぎたのはわかっているが、それを悟られるのはなんとなく気恥ずかしい。
「し、仕方ないだろ。ホントに似合わないんだから。それより看板書かなくていいなら、オレはゴミ捨てにでも行ってくるぜ……」
少し突っぱねるような感じの口調で言い放つと、達也は集めた木屑をビニール袋に詰めてバタバタとその場から立ち去っていく。
「……まったく、気の利いた一言でもかけられないのかしらね……」

自分の股間に視線を向けて、彼は拗ねた子供のように口を尖らせて呟く。
「うふふっ、これでキマリね。じゃあ……」
小さな手をパチンと打ち合わせて微笑むと、しのぶは横たわる達也の手を引いて一緒に立ち上がる。そしてメイド服の前を開いて、さらに真っ白なブラまで首元までたくし上げた。美しい釣鐘型に形が整い、キュッと乳首が上向きに尖った乳房が目の前で揺れる。
「あ……」
日焼けサロンで一糸纏わぬ姿で焼かれたであろう素肌は、下着の中まで健康的な茶褐色に染まっている。しかし小さな乳首にはニプレスでも貼っていたのか、桜の蕾を髣髴とさせる薄紅色に輝いていて、実に可愛らしい。初めて目にする少女の胸に、純情少年の目はもう釘付けだ。
「ほらぁ、見てるだけでいいの？」
子供をあやす母親のような優しい口調で呼びかけると、しのぶは大工仕事で鍛えられてガッチリとした手首を掴む、そしてみずから胸元まで引き寄せた。
むにゅっ……。
マシュマロのような柔らかさと、激しい胸の鼓動が手の平にトクトクと伝わってくる。
（お、女の子の胸って……こんなに柔らかくて、暖かいんだ……）
手の平いっぱいに広がる、今まで味わった事のない心地いい感触。もっとはっきりと感

えっちシーン読み読みから買い！

じたくて、達也は夢中で指を動かし始めた。丸みを帯びた乳房に節くれた指が食い込み、ゴム鞠のようにグニュグニュと形が変わっていく。

「ひっ、はふうんっ……うっ、うまいじゃない、達也君……」

潰れてしまいそうなほど強く握られ、指先で乳首を軽く抓られるたびに胸いっぱいに電気ショックのような痺れが走り、金髪ギャルの薄い唇から艶めかしい声が自然と漏れる。

「ね、ねぇ……達也君。ちょっと、しゃがんでくれる？」

やがて感極まったしのぶは頬を紅潮させ、荒い息を吐きながら興奮気味に話しかけてきた。

「えっ？　あ、ああ……」

突然妙なお願いをされて、戸惑う達也は気の抜けた返事をすると言われるままにしゃがみ込む。丁度目の高さが、彼女の股間の所に来る形で。

「……ホントはね、閉じ込められてからずっと、ドキドキしちゃって……こんなになってるんだよ……」

たどたどしい口調でそう告白すると、しのぶは右手でおずおずとスカートをたくし上げる。さらに震える左手の指で股布を摘んで、クイッと真横へずらした。青白い月明かりの下に晒された秘所は、すでに溢れ始めていた透明な恥蜜で濡れてキラキラと輝いている。埃っぽい小屋の中に、果実のような爽やかな香りを漂わせながら。

「……おっ、お前、ホントは黒髪なんだな……」
初めて目にする乙女の丘に心躍らせながら、染められていない股間の若芝をジッと見つめて達也はわざとらしい口調で呟く。
「えっ！　……ばっ、ばかぁ……変な事言わないでよぉ……」
いつも自分の事をからかってくる彼女が恥ずかしがるのがおかしく、そして可愛らしくてつい仕返ししたくなってしまったのだ。彼のイジワルは、なおも続く。
「それに、こんなところまで焼いてるのに……」
ニヤニヤと笑いながら呟くと両手の親指をスリットに引っかけ、左右に大きく割り開く。粘液を纏った桃色の肉襞と、その奥でひっそりと輝く小さな肉粒が顔を覗かせた。
「中は、こんなにきれいなピンクでヌルヌルに……」
くりゅっ、くちゅくちゅ……。
小指の先を軽く入り口に食い込ませ、わざと厭らしい水音を立てるようにクルクルとかき回す。
「もうっ、イジワルなんだからぁ……」
恥ずかしい言葉に耳元を擽られ、しのぶは茹で蛸のように真っ赤に火照った顔を両手で覆い隠して身を捩る。
ピチュ……。

開かれた蕾の奥底から、甘酸っぱい香りの雫が垂れ落ちた。蜜を探す蝶を誘っているかのように。

「……キスして、いい？　ここにも……」

「ええっ！　だっ、ダメだょぅ。こんなところ、きた……はうんっ！」

チュッ！　ぷちゅっちゅっちゅっちゅるるっっっっ……。

恥ずかしがるメイドギャルに有無を言わさず、彼は荒れた唇を股間へと吸いつける。そして少しザラついた舌で、肉穴の中を丹念に舐め回し始めた。

めちゅめちゅ、ぷりょぷちゅぴちゅ……。

ヒクヒクと痙攣する奥園から、ラヴジュースが、堰を切ったように次々と溢れ出てくる。

「あっ、あんっ……しっ、信じらんなぁ～い……そんなところ、ペロペロって……いやらしい、エッチィ……ばかぁ～」

華奢な褐色の身体をピクピクと震わせて、しのぶは涙声で喘ぐ。耳から入り込む淫靡な響きが脳髄を擽り、その刺激が電気ショックのようにビリビリと膨張した肉棒に送られていく。彼の欲望をかき立てるものは他にもある。開閉する肉のスリットの中から顔を覗かせる、薄紅色をした肉の花弁。青白い月の光に照らされたそれは、まるで深海で揺らめく桃色珊瑚のように美しく、そして艶めかしい。見ているだけで、興奮してパンパンに膨らんだ一物に纏わりつき、そして揉み扱かれているような錯覚を覚えるほどに。

つからないようにする理性がわずかながらも働き、大きな淫音を立てるぐらい激しく腰を振るのを抑えている。

チュプッ……チュプッ……。

それでも、雨漏りしているような小さな水音が漏れてしまう。

「あっ、あんっ、んっ……ばっ、ばかぁ……んっ……んっんっ……」

一方でしのぶも、いくら我慢しても淫らな喘ぎ声が漏れてしまうのを抑えようと、咄嗟に右手の親指を口の中へ押し込む。唾液にまみれた指をしゃぶる唇の動きが艶めかしい。何か違う物を舐めているようにも見えてしまう。

（な、中里……）

ヴァギナを貫きながら、同時にフェラチオまでされているように奇妙な錯覚に囚われて、心臓が爆発しそうなほど鼓動が早くなる。

『もうバレてもいいから、思いっきり突いてやれよ』

かろうじて暴走を抑えている理性を打ち壊すような、悪魔の囁きが耳に纏わりつく。

（……も、もう……オレ……）

「さ、さて……それじゃそろそろ行こうか」

完全に歯止めが利かなくなりかけたその時、演劇部のイケメン役者は突如として早く出ようと急かし始める。

えっちシーン試し読ここからスタート!

「ど、どうしたんですか？　急に……」
「今日中に完成させたいんでね。さあ、急がないと……」
不審がる後輩の手を引き、物置を後にする一成。再び明かりが消されて、倉庫の中は薄暗くなった。
「やだ……バレちゃった？」
「……もっ、もう……遠慮は、んっ、いっ、いらないな……」
邪魔者二人が出て行ったのを確認すると、気付かれたかと不安がるしのぶにかまわず達也は激しく腰を振り始める。まだ強張っている膣内で、極太のペニスを暴れ馬のように跳ね回らせた。
ズリュッズルッズブッブズブズッ……。
「ちょっ、そっ、そんな……いきなり、んっ、あっ、かはぁんっ！　すっ、すごすぎるよぉ……」
安心して愛しあえる状況になった途端に、高熱の塊で勢いよくヴァギナの中をかき回され、彼女もまた外まで聞こえそうなほど大声を張り上げて喘ぐ。
グシャクチャグチャグチュ、グリュッグリュッグチュグチュッ……。
淫らな愛の調べが、再び外まで聞こえてしまいそうなほど大きく、そして激しく奏でられ始める。同時に、奇妙な別の音も。

ぱぷっ、ぱふっぷぷっ、ぱふっ……。
「ええっ!!?　やっ、やぁっ！　なに？　変なの……いやぁんっ、こっ、こんな音……やだぁ……」
尻の谷間から鳴り響く、放屁のような音。汗と愛液で滑りがよくなり、ピストン運動が早まったせいでバックスタイル特有の空気音が流れ始めたのだ。
「かはっ、いっ、かわいい、かわいいよぉ、その声も、音も……」
恥ずかしさに悶えるしのぶの姿に興奮し、達也はますます腰の動きを早めた。
ずりっぷちゅっ、ぱぷはぷ、ぷしゅっくちゅっ……。
「やあんっ、そっ、そんなに強く……あっ、あぁーんっっっっ……」
激しく突き込まれる肉棒の衝撃は、彼女の柔らかな肉体ばかりか喘ぎ声までブルブルと震わせていく。薄暗い密閉空間の中で、密かに続く愛欲の宴。いつまでも続けたい甘い時間にも、やがて終止符が打たれる時が来る。湿った肉襞で揉まれるペニスがブルブルと震え、発射の時が刻々と迫っているのを持ち主に告げた。
「なっ、中里……オ、オレ……もう……でっ、出る……出ちまう、でも……」
顎(あご)を反らし、大柄な肉体を震わせて達也は喘ぐ。
「さっ、最後は……お前の顔、見ながら……一緒にイキたい……いいだろ？」
「……いっ、いいよ。はずかしいけど、達也君がそうしたいなら……」

振り向き、戸惑いの表情を浮かべながらも、健気な少女はようやく結ばれた大好きな男の子の願いを聞き入れる。やはり面と向かって繋がるのは恥ずかしいらしく、目尻がヒクヒクと震えていた。彼女の返事を聞いて、達也は一旦腰を大きく後ろへ引く。

ジュポンッ……。

艶めかしい水音を立てて、膣口から極太のペニスが引き抜かれると、しのぶは床に敷かれた古いマットレスの上に寝転ぶ。そして膝を抱えて、両足をM字型に大きく広げてみせた。

「……こっ、これで……いい？」

横を向き、こちらへ恥ずかしそうな視線をチラチラと送りながら震える声で問いかけてくる金髪メイドギャル。そのしおらしい姿は、エプロンの肩紐に付いたフリルが白い羽根のように見える事も相俟って、まるで天使のように可愛らしい。

「……ホント、可愛いよ……中里。この世の誰よりも……」

ぐちゅっ、ぐちょっぐちゃぐちゅじゅるじゅる……。

眼下でさらに踏み荒らされる事を望む花園を晒す美少女を見下ろし、甘く囁くと彼は開いた股の間に身を屈め、粘液をドロドロに纏った陰裂の中に再び己が分身を沈めていく。そして素早く、それでいて上質な杉板に鉋がけするかのように丁寧な動きで、彼女の中を擦り始めた。

ぴちょっ、びちゅっびりょっびゅっびちょっびちゅっ……。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/